

つづめてみよう

日本人は何かにつけて言葉を約めるのが好きだ。

えのけん（榎本健一）、もうむす（モーニング娘）、パソコン（パーソナルコンピュータ）、ワープロ・ワーブ（ワードプロセッサ）、おじん（おじさん）、おばん（おばさん）、うえろく（上本町六丁目）、てんろく（天神橋筋六丁目）、ぶくろ（池袋）、じゅく（新宿）、おばね（尾花沢）、なお渋谷は「ぶや」とは言わない。いんでん（印度伝来の象牙細工の手法）なんてのもありましたな。

これ以外の近頃のティーンネイジャーの言う約め言葉は私の記憶の外にある。略されすぎてわからない。

こうして長すぎる言葉を約める理由は、会話の能率を高める、あるいは特に約めなくてもいいのにことさら約めてその言葉の調子の面白さを楽しむ、と色々あろう。

中国人もきっとそうなのだとおもう。時代が下がって熟語のようにいくつかの漢字を組み合わせ使用することが多くなったが、ひとつの概念を1字の中に集約するのが本来の漢字である。

中国の省や都市の名前は大体2字である。雲南の普ぶうある茶で有名な「西しい双さん版ばん納な」、内蒙古の省都「呼ふ和ほ浩ほ特と」は4字だが、これは異例である。もともとが漢語圏外の区域であるから個々の文字の音を使用している。漢字の意味を使っているわけではない。

ひとつの土地の名前を表すのに使う文字・音は少ないほうがいいに決まっている。「江」は揚子江、「河」は黄河だ。日本だってむかしは「寺」とくれば三井寺だ。「花」とくれば桜だ。「人」は武士だ。

ということで中国の省や都市を本来の名前以外に略称や別称(ニックネームなのか)で呼ぶ。共通の認識ができれば充分である。これは新華字典にあるくらいだから公式にも認められているものだろう。

これからいくつか挙げてみる。

北京市 = 京 青海省 = 青 新疆自治区 = 新 吉林省 = 吉 寧夏省 = 寧
遼寧省 = 遼 香港特別区 = 港 澳門特別区 = 澳

ここまでは名称の一部を取り出したに過ぎない。ちょっと気を利かせれば理解できる。

しかし、ここから先はちょっと違う。

福建省 = 閩 山東省 = 魯 陝西省 = 陝・秦 雲南省 = 雲・滇 安徽省 = 皖
四川省 = 川・蜀 山西省 = 晋

陝西省は「陝」以外に「秦」、雲南省は「雲」以外に「滇」、四川省は「川」以外に「蜀」という別称を持つ。その他、福建省・山東省・安徽省・山西省は一部を取り出すのではなくて、今の名称に含まない文字で略称としている。

その理由はもうお気づきだろうが、古代の名称にある。

閩 = 種族名、古代福建省に住んでいた。

魯 = 春秋時代の国名、山東省西南部。

秦 = 国名、陝西省。始皇帝の時中国を統一。

滇 = 異民族名、戦国時代から前漢まで雲南省東部。

皖 = 漢代の県名、安徽省潜山県の北部。

蜀 = 戦国時代の侯国、四川省。三国時代の魏・呉・蜀の中の一国。

晋 = 春秋時代あるいは唐末の国名、山西省。魏の後を襲った晋は河南・陝西省。

こんな古い時代の地名を充てているのである。つまりはその住民は勿論、中央政府も古代に自らのルーツを求めていることになる。

歴史的事実を評価する時に、評価する人間が生きている時代の思想や社会通念を物差しにしてはならないのが学術の基本である。

しかし、毛沢東によるプロレタリアート革命によって一時期は孔孟の思想さえ間違いだと否定されていた。また埋蔵文化財の発掘は熱心にされていたが、その評価は『こうした遺跡を作り上げたのは人民の勝利である』という画一的なものだった。だから私は現代中国では、昔搾取的ブルジョアジーが作った国の名前など否定する以外の何物でもないだろうと勝手に思っていた。

今日、中国が過去の遺産を自らの生活の中に用いているということは、現代中国は自らの存在する歴史的位置を冷静に客観的に見るだけの余裕を持ったということか。